

不確実性に強いS&P500配当貴族指数



シニア・ストラテジスト 石黒英之

ポイント① 米配当貴族指数に改めて注目

ウクライナを巡る地政学リスクの長期化、インフレ抑制に向けたFRB（米連邦準備制度理事会）の金融引き締め加速への懸念、中国のコロナ感染再拡大による景気失速や供給網混乱懸念など、現在の市場は、不確実性の高い状況が続いています。

3月2日付レポートでもご紹介しましたが、こうした環境下で注目したいのが「S&P500配当貴族指数」です。同指数は25年以上連続で増配している銘柄で構成（構成銘柄数が40を下回った場合には、20年以上連続で増配している銘柄の中から補充）されており、配当の原資となる利益が安定的に成長している企業が中心となっています。「課税前配当込み」でみると、同指数は母集団であるS&P500種株価指数や、TOPIXを大きく上回るパフォーマンスとなっており（右上図）、長期視点で魅力的な指数といえます。

ポイント② 不確実性の高い局面に強い傾向

4月11日時点の年初来のパフォーマンスをみても、S&P500配当貴族指数が-2.1%、S&P500種株価指数が-7.1%（課税前配当込み）となっており、不安定な値動きが続く2022年相場でも前者は底堅い動きをみせています。S&P500配当貴族指数は株価下落局面に強い傾向があり、ITバブル崩壊局面で同指数はS&P500種株価指数と比べ堅調に推移（右下図）したほか、リーマン・ショック前後でも、相対的な強さが目立ちました。

連続増配できるということは、その企業が外部環境に左右されずに利益を拡大させる力を有しているといえます。不確実な局面でも「成長」と「増配」を維持する企業群には、投資資金が流入しやすいとみられ、こうした指数に投資するのも一手と考えます。

主要株価指数の推移（課税前配当込み）

(1998年1月末終値 = 100)



期間：1998年1月末～2022年4月11日、月次

・TOPIXは円ベース、その他は米ドルベース

(出所) Bloombergより野村アセットマネジメント作成

ITバブル崩壊直前の高値からの株価推移

(2000/3/24終値 = 100)



期間：2000年3月24日～2005年3月23日、日次

・いずれの指数も米ドルベース

・「高値」とはS&P500種株価指数が終値ベースで高値をつけた時点を指す

(出所) Bloombergより野村アセットマネジメント作成

*当資料は、一部個人の見解を含み、会社としての統一見解ではないものもあります。

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。